

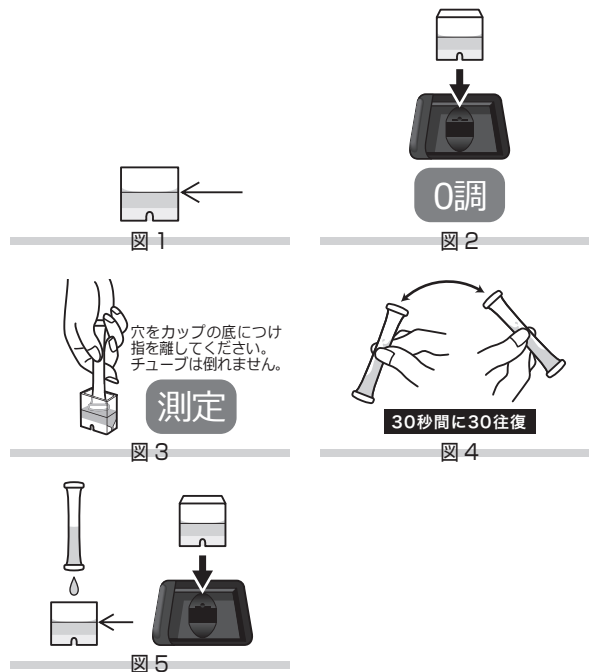
## NH<sub>4</sub>-N アンモニウム態窒素（試薬の型式が WAK-NH<sub>4</sub>-4 の場合）

発色：無色→淡青→青  
 測定原理：インドフェノール青法  
 測定範囲：0.20 ~ 4.00 mg/L (ppm)  
 試薬：WAK-NH<sub>4</sub>-4 チューブ  
 測定時間：チューブに吸い込み後 10 分

セル：専用カップ  
 使用波長：643 nm, 590 nm

### 測定方法

1. [NH<sub>4</sub>-N]を押します。
2. [決定]を押し、測定画面に切替えます。
3. 検水を、専用カップに1.5mL(線まで)採ります。(図1)
4. 専用カップをセルボックスに入れ、【0調】を押します。(図2)
5. パックテストのチューブの穴を検水の中に入れ、指を離し検水を一気に全量吸い込みます。同時に【測定】を押します。(図3)
6. 5. のチューブを30秒間に30往復、左右に転倒させて振り混ぜます。(図4)
7. すぐに専用カップにチューブ内の測定液を静かに戻し、セルボックスに再びセットし静置します。(図5)
8. 経過10分後に濃度が自動表示されます。



### 注意

1. 発色時の最適 pH は 13 です。pH が 5 ~ 13 の範囲をこえる検水は希水酸化ナトリウム溶液または希硫酸等で中和してから測定してください。
2. 検水の温度は 15 ~ 30℃で測定してください。
3. 結果にばらつきが生じやすいので、精度の高い結果を得るために次の点にご注意ください。
  - 検水をチューブに吸い込むときは、チューブの穴を専用カップの底につけたまま指を離し、一気に全量吸い込んでください。
  - チューブに検水を吸い込んだら直ちに振り始めてください。
  - 振り方は、検水がチューブの両端を行き来するように左右に転倒させます。30秒間(1秒間に1往復)振ってください。
4. 「測定方法」6 で振り混ぜた測定液はすぐに専用カップに戻してください。チューブ内で静置すると濁りを生じる場合があります。

### 共存物質の影響

内蔵の検量線は、標準液を用いて作成しています。他の物質の影響が考えられる場合は、公定法と比較するか、標準液添加法により測定値を確認してください。

右表は、標準液に単一の物質を添加した場合の測定値への影響データです。

海水は測定できません。

海水や共存物質の多い検水を測定する場合、濁りや異常発色により誤差を生じますので、蒸留してアンモニウムイオンを分離してから測定してください。

蒸留は、JIS K 0102 42.1 蒸留法に従って行ってください。

重金属以外：		
1000mg/L以下は影響しない	//	…B <sup>3+</sup> (ほう酸)、Cl <sup>-</sup> 、F <sup>-</sup> 、I <sup>-</sup> 、K <sup>+</sup> 、Na <sup>+</sup> 、NO <sub>3</sub> <sup>-</sup> 、SO <sub>4</sub> <sup>2-</sup> 、陰イオン界面活性剤、残留塩素
500mg/L	//	…フェノール
250mg/L	//	…PO <sub>4</sub> <sup>3-</sup>
100mg/L	//	…Ca <sup>2+</sup>
50mg/L	//	…Mg <sup>2+</sup> 、NO <sub>2</sub> <sup>-</sup>
5mg/L	//	…ホルムアルデヒド
重金属等：		
250mg/L以下は影響しない	//	…Zn <sup>2+</sup>
100mg/L	//	…Ba <sup>2+</sup> 、Cr <sup>6+</sup> (クロム酸)、Ni <sup>2+</sup>
50mg/L	//	…Al <sup>3+</sup>
25mg/L	//	…Cr <sup>3+</sup> 、Mo <sup>6+</sup> (モリブデン酸)
10mg/L	//	…Ag <sup>+</sup> 、Cu <sup>2+</sup>
5mg/L	//	…Mn <sup>2+</sup>
1mg/L	//	…Co <sup>2+</sup>
	少しでも影響する	…Fe <sup>2+</sup> 、Fe <sup>3+</sup>

### 試薬に関するお知らせ

パックテストに付属の使用法をご参照ください。

測定液は約 pH13 です。